



こども府中はかせ 3

ふ ちゅう でんせつ
府 中 の伝説

まつはきらい



ぼたもちくわーん

おお がい
大いちょうのにな貝

にし こうしん
西むき庚申さま

だいじゃ
おみたらしの大蛇



こくうでん なえ
御供田の苗

ふか
おお深い



はな じ ぞう
鼻どり地藏

むるがこわい

だんごむすこ

ほう
たぬきのお坊さん



ぼたもちくわーん

ある年のお彼岸のことです。お寺に“ぼたもち”が届けられました。和尚さんは留守でした。そこで小僧さんは、こっそり“ぼたもち”を一つつまんで食べてみました。

「ああ、うまい。ああ、うまい。」

小僧さんは、むちゅうでぜんぶ食べてしまいました。

「さて、困った。どうしようか。」

しばらくすると、小僧さんは立ち上がって本尊さまの口のまわりに、あんこをぬりたくりました。

やがて和尚さんが帰ってきました。

「おまえ、“ぼたもち”をみんな食べてしまったのか。」

「いいえ、私はいけません。きっと本尊さまが召し上がったのでしょう。」

と言って、小僧さんは本尊さまの口を指さしました。

「“ぼたもち”をひとりで食べてしまうなんて、ひどい本尊さまだ。

よし、かまゆでにしてくれる。」

おこ お しょう にわ おお . . . ほんぞん な い
怒った和尚さんは、庭に大きなかまをすえて、本尊さまを投げ入れました。

こ ぞう ひ ほんぞん
小僧さんが火をつけると、本尊さまは、

「くった くった くった くった。」

と、煮えはじめました。

「やっぱり本尊さまがくったんだ。」

そこで、お しょう ほんぞん . . . だ
和尚さんは本尊さまをかまから出して、ばちでなぐりました。

すると、こんどは、

「くわーん くわーん。」

と、聞こえました。

「あ、くわなかったのですか。これは、もうしわけないことをしました。」

お しょう ほんぞん もと ば しょ
和尚さんは、あわてて本尊さまを元の場所におかえししました。

そして、それからは、ずっと本尊さまを大切にしたということです。

たぬきのお坊さん

むかし、本町の安養寺にえらい住職がいて、全国から優秀な弟子が集まってきた。なかでも、はるばる九州からやってきた若いお坊さんは毎日まじめに働き、住職はその働きぶりにいつも感心していました。

ある春の昼下がり、お坊さんは修業の疲れで居眠りをして、その時うっかりしつぽが出てしまいました。住職に正体がばれてしまったのです。

「おまえはたぬきだったのか。」

お坊さんはあわてて“しっぽ”をかくしましたが、もう間に合いません。

そこで住職に向かって両手をついて言いました。

「私が人間に化けてもう3,000年もたちます。幸運なことに天竺（インド）

でお釈迦さまのお説教を聞くことができました。お世話になったお礼に、明日

の夕ぐれに人見が原でその様子をお目にかけますのでぜひ来てください。しか

し、どんなことがあっても合掌だけはしないでください。」

たぬきはすべてを住職に打ち明けると、別れのあいさつをして姿を消しました。

よくじつ ゆう じゅうしょく で し ひと み はら
翌日の夕ぐれ、住 職 は弟子たちをつれて人見が原に行きました。そこは、府中
まち ぼくとう ぶ とう じ の はら ちか こ だか おか せんげん
の町の北東部にあり、当時は野原でした。近くには小高い丘があり、ここを浅間
やま
山といいます。

じゅうしょく ま せんげんやま ひか かがや
住 職 たちがじっと待っていると、しばらくして浅間山のあたりに光り輝くお

しゃ か じゅうしょく め まえ ほとけ せ かい
釈迦さまがあらわれました。住 職 たちは目の前に 仏 の世界があらわれたこと

おどろ よろこ おも がっしょう おが
に 驚 き 喜 んで、つい思わず合掌して拝んでしまいました。すると、たちまち

ほとけ せ かい き ふうけい
仏 の世界は消えてしまいました。あとにはいつもの風景があるだけでした。

ご じゅうしょく まえ に ど
その後、たぬきが 住 職 の前にあらわれることは二度とありませんでした。

はなし で か もんじょ いま あんよう じ たからもの
このお 話 に出てくるたぬきが書いたとされる文書が、今も安養寺に 宝 物とし

ほ かん
て保管されています。

だいじゃ おみたらしの大蛇

みず あめ じ だい はなし
水を、雨にだけたよっていた時代のお話です。

ひ ひがしがわ ひと み むら ぎ せんげんやま はい
ある日、府中の東側、人見村のおばあさんが、たき木をとりに浅間山へ入りました。たくさんたき木を取ったので、わき水のそばでひと休みすることにしました。そこには折れた大きな松の木がありました。

「よっこらしょ」

おばあさんがこしをおろしたとたん、その木が動き出すではありませんか。よくみると、それは人々から“おみたらしのぬし”と呼ばれ、祀られている大蛇だったのです。おばあさんは、むちゅうで山をかけおり、家に逃げ帰りました。あまりに驚いたおばあさんは、体が弱って寝込んでしまい、気の毒にも死んでしまいました。

だいじゃ みず ひ で つづ
この大蛇がいたというわき水は、どんなに日照りが続いてもかれたことがなく、ひとびと よ たいせつ まも
人々は、“おみたらし”と呼んで大切に守ってきました。

むかしは、

「“おみたらし”の方へ行くと大蛇が出るから遊びにいくんじゃない」

い
と言われたそうですよ。

はな じ ぞう 鼻どり地藏

むかし、あるお百姓^{ひゃくしょう}さんが、馬^{うま}をひいて田んぼ^たを耕^{たがや}していると、とつぜん馬^{うま}があばれだして動^{うご}かなくなっていました。

お百姓^{ひゃくしょう}さんが困^{こま}りはてていると、そこに小僧^{こ ぞう}さんがやってきて、馬^{うま}の鼻^{はな}をとって引^ひっぱってくれました。

すると、たちまち馬^{うま}はおとなしくなって、お百姓^{ひゃくしょう}さんはぶじに田んぼ^たを耕^{たがや}し終^おえることができました。お礼^{れい}を言^いおうとふりかえると、小僧^{こ ぞう}さんの姿^{すがた}はどこにもありませんでした。

馬^{うま}をひいての帰り道^{かえ どう}、田んぼ^たから小さな足あと^{ちい あし}が是政^{これまさ}の西蔵院^{さいぞういん}に向かって続^むいていました。ふと見^みると、お地藏^{じ ぞう}さまの衣^{ころも}のすそが泥^{どろ}で汚^{よご}れていたのです。そこでお百姓^{ひゃくしょう}さんは、あの小僧^{こ ぞう}さんがお地藏^{じ ぞう}さまだったと分かりました。

それからというもの、このあたりのお百姓^{ひゃくしょう}さんは、馬^{うま}を使^{つか}うときには必^{かなら}ず是^{これ}政^{まさ}の西蔵院^{さいぞういん}へお参^{まい}りに行くようになった、ということです。

もっと知りたくなったら読む本のリスト

しよめい ほん なまえ 書名（本の名前）	ちよしゃ ほん か ひと 著者（本を書いた人）	しゅっぱんねん 出版年	ほん せ 本の背ラベル
むさし ふ ちゅうものがたり じょう 武蔵府中物語 上	さわたり もりあつ ちょ 猿渡 盛厚 / 著	1963	F213/10/サ
グラフ 府中 だい ごう 第10号	ふ ちゅう し き かくちやうせい ぶ こうほう か 府中市企画調整部広報課 / へん 編	1975	F318.5/10/ク*
グラフ 府中 だい ごう 第12号	ふ ちゅう し き かくちやうせい ぶ こうほう か 府中市企画調整部広報課 / へん 編	1976	F318.5/10/ク*
まつはきらい	お ざわ とし お ちょ 小沢 俊夫 / 著	1986	F38/オ
はな じ ぞう 鼻どり地藏	お ざわ とし お ちょ 小沢 俊夫 / 著	1987	F38/オ
たぬきのお坊さん	お ざわ とし お ちょ 小沢 俊夫 / 著	1988	F38/オ
ふ ちゅう くちつた しゅう 府中の口伝集	ふちゅうしりつきやうどかん へん 府中市立郷土館 / 編	1986	F38/フ
むさし ふ ちゅう みんぞく 武蔵府中の民俗	きた の あきら ちょ 北野 晃 / 著	1988	F380/10/キ
とうきやうみん わ 東京民話	あさひしんぶんしゃしゃかい ぶ へん 朝日新聞社社会部 / 編	1956	F388/00/ト
むさしの みんわ でんせつ じょう 武蔵野の民話と伝説 上	はら だ しげひさ へん 原田 重久 / 編	1976	F388/02/ハ
とうきやう みんわ 東京の民話	こ いけ すけ お ちょ 小池 助男 / 著	1979	O913/コ

さがしている本が見つからないときは、図書館の人にきいてみましょう。



「府中の伝説」 こども府中はかせ No.3

2014年3月発行

2025年3月改訂

府中市立図書館 編集・発行

<https://library.city.fuchu.tokyo.jp/>